



TITLE:

あるポンドック(寄宿宗教塾)の変容 1971-1992:避難所としての存続

AUTHOR(S):

坪内, 良博; 坪内, 玲子

CITATION:

坪内, 良博 ...[et al]. あるポンドック(寄宿宗教塾)の変容1971-1992: 避難所としての存続. 東南アジア研究 1993, 31(2): 89-103

ISSUE DATE:

1993-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/56491>

RIGHT:

あるポンドック（寄宿宗教塾）の変容 1971-1992

——避難所としての存続——

坪内良博*, 坪内玲子**

The *Pondok* as a Place of Refuge :

Changes in a *Pondok* in Kelantan, 1971-1992

Yoshihiro TSUBOUCHI* and Reiko TSUBOUCHI**

In traditional Malay society, the *pondok* was a place where young students gathered to study Islam, living in residential huts which they built around the house of a *guru* (religious teacher). The introduction of the modern education system was a challenge to this traditional institution. Some well-known *pondok* reorganized their curriculum to make it more systematic and improved their dormitory facilities. Smaller and less popular *pondok* accepted more old people as residents. Such changes were already apparent when the first survey was conducted in 1971, focusing on a *pondok* in Pasir Mas District.

A follow-up survey after 21 years revealed that *pondok* have survived in Kelantan by diversifying and dividing their functions between major and minor *pondok*. A follow-up survey in a particular minor *pondok* suggested that one of the additional functions of the *pondok* institution is to provide a place of refuge for people in need. Thus, such people as handicapped women and divorcees chose this *pondok* as a place of temporary residence. The observed changes in *pondok* confirm that religious institutions, once established, persist by modifying their functions and do not easily decline.

I はじめに

ポンドック (*pondok*) というのは、マレーシア語で小屋の意味であるが、イスラムの宗教教師 (グル, *guru*) の家と教場 (マドラサ, *madrasah*) を中心にして建てられた多くの小屋に、弟子達が住んで、自炊生活を行いながら師の教えをきく、一種の寄宿宗教塾もこの名で呼ばれている。個々の小屋がポンドックなのだが、寄宿宗教塾全体もポンドックと呼ばれる。この種の宗教塾は、マレー半島北部の諸州や南タイ等に分布し、マレー人の間で宗教教育の役割を担ってきた。マレー半島のポンドックについては、1960年代および70年代にかけていくつかの報

* 京都大学東南アジア研究センター; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

** 龍谷大学経済学部; Faculty of Economics, Ryukoku University, 67, Tsukamoto-cho, Fukakusa, Fushimi-ku, Kyoto City, 612, Japan

告がある [Cf. Rauf n.d.; Fraser 1960; 藤本 1966; 矢野 1970; Winzeler 1970; Winzeler 1974; Awang Had 1977, etc.]。¹⁾ 1980年代以降になると、教育制度の整備とともに、伝統的教育の研究は以前ほど盛んではなくなっているようにも思われるが、少なくとも南タイについては比較的新しい記述を見いだすことができる [Cf. Surin 1985]。本論では、これらの報告で明らかにされているポンドックの教育機能に着目するというよりも、ポンドックという集落の形に着目しながら、クランタン州のポンドックの変化を追跡する。1971年に行ったクランタンの農村部の小さなポンドックの全戸調査に、1992年に同じポンドックを再訪して実施した全戸調査を重ねあわせ、この弱小ポンドックにおける変化とは何であったかを明らかにすることを試みる。²⁾

宗教教師の知識と、時には霊力ともみなされる人をひきつける力とが、ポンドックの名声に関係するため、ポンドックは一代限りという性質を持つ可能性がある。しかし、実際には多くのポンドックは父から子へと引き継がれている。学校教育の普及、とりわけ中等教育の普及は、ポンドックで学ぶ若者たちの数を著しく減少させたが、一部のポンドックでは、私立の中学校あるいは高等学校に相当するアラビック・スクールを併設したり、サウジアラビアやエジプトなどの大学との連携をつくりあげたり、組織の改編や建物の改良を行いながら、伝統と近代化の間で調和を模索してきた。この種のポンドックの中には、イスラム政党の勢力が増大したクランタン州の政治的状況を背景に、州政府から補助金を得て、建物や環境を整備して、スルタンの訪問をうけたりするものもあった。この意味では、ポンドックにおける教育は消滅せず、新たな役割を担うようになったと評価することもできる。

しかしながら、いくつかのポンドックを訪ねてみると、若者達の居住する小屋や寮の他に、第二のカテゴリーとして老人達の小家屋が区域内に存在していることに気が付く。ポンドックは高齢者を受け入れることによって、一種の機能転換を図ってきたのである。あるポンドックでは、有志の援助を得て、前面に長い共通の廊下を持つ長屋状の高床家屋を敷地内に建設し、社会福祉局から月30リンギット（1992年時点で1リンギットは約50円）の生活扶助を受けながら、細々とした生活を送る寄る辺のない単身の高齢者達に住まいを提供して、一種の私設老人ホームとしている。

ポンドックの居住者の第三のカテゴリーは、普通の家族である。宗教教師の家族や親族がポンドックの敷地内に住んでいることは当然のことであるが、この他に、宗教教師の何らかの縁

1) ポンドックに類する寄宿宗教塾は、ジャワ、スマトラ・カリマンタン等にも見られ、1960年代および70年代に、かなりの記述や紹介がある [Cf. Geertz 1960; Castles 1966; Siegel 1969; Sudjoko 1974, etc.]。近年では、西野 [1990] にまとまった記述がある。

2) 最初の調査は、1971年7月に坪内良博によって行われ、まとまったものとしては、坪内 [1973] として報告されている。再調査は、それから丁度21年後の1992年7月に、坪内良博および坪内玲子によって行われた。

につながる遠い親族や知人が、宗教の名において人々を受け入れることを標榜するポンドック地域に彼らの家屋を建てて、通常の生活を営むことがある。

著名ではないポンドックでは、そこに学ぶ若者達の減少と、それを補完する単身の高齢者達の増加が顕著である。このような変化は、既に1970年の時点で、多くのポンドックにおいて観察されたが、1992年の時点では、その状態は定着している。

II 或る弱小ポンドックの成立と推移

このポンドックは、イスラム暦1356年（西暦1937年）に、パシルマスとタナメラの中間にある、ガロックの集落に隣接する場所に開かれた。前回の調査では、1919年生まれのグルが、1エーカー余の父親の土地にこのポンドックを開設したことになっている。しかしながら、グルの生年については疑問があり、初婚年齢が22歳であること、長男の生年が1934年であることなどを考慮すると、それよりも数年早く生まれていると考えねばならない。彼は、パシルマスやその他のポンドックで学んだ経験を持つが、メッカに長期滞在したことはなく、1953年に通常の巡礼を行っている。

ポンドック開設当初は、生徒の数が少なかったが、次第に増加して数年後には少年の数が50人を数えるようになった。ポンドックの近辺の集落に民営の初等学校（*sekolah rakyat*）が開設されたのは、1949年のことであり、少なくともこの辺りでは、世俗的教育の開始に先立って、ポンドックが少年達の教育の機能を遂行したのである。この民営の学校は、1953年に政府の手によって改修され、さらに1959年からは国民学校（*sekolah kebangsaan*）として政府に移管された。1960年頃にはポンドックに住む少年の数は約20人に減少したという。若者の減少に対して、50代および60代を中心とする高齢者（とくに高齢女子）が増加し、1960年代半ばには、高齢者の数が少年の数を上回るようになったという。1965年1月には、6キロメートル余り離れたカンコン（Kankong）に初等中学校が開校し、学校教育がさらに進展していき、1971年の時点では、ポンドックに居住する少年の数は、僅か5人となった。1986年に初代のグルが死亡すると、それまでタナメラ郡のパロー（Paloh）に住んで、そこでイマム（イスラムの導師）をしていた長男（1934年生まれ）が、家族とともに帰ってきて、隣集落パダンハングスに開設されたアラビック・スクールで教鞭をとりながら、ポンドックでも宗教を教えるようになった。現在、退職後の生活を送っているグルは、15キロメートルほど離れたタナメラに通って小事業をしながら、週1回、木曜日だけに宗教を教えている。いわば片手間の宗教教師であり、ポンドックは引き続いて維持されてはいるものの、発展への志向は失われている。

III 家屋配置および居住条件

1971年の時点では、ポンドック地域にはマドラサと井戸とを中心にして、大小57軒の建物(マドラサを含む)があった。これらの建物の配置は図1に示すとおりである。グルの家は道路に面して建てられ、裏側でマドラサにつながっている。小屋のうち5軒は無人であった。すべての家屋は高床で、大きな家屋は900平方フィート(約81 m²)あるいはそれ以上の床面積を持つが、小さな小屋は100~150平方フィート(9~13.5 m²)程度であった。グルの家やマドラサを含む大きな建物は、クランタン州一帯に見られるようなスレートで屋根が葺かれ、側壁には少なくとも部分的に木材が用いられている。その他の大部分を占める小屋(ポンドック)は、アタップ葺き(ニッパ椰子の葉を編んで葺く)で、編み竹の壁を使っていた。通常の大きさの家屋の構造は、付近の農村の家屋とほぼ同じであるが、小屋の構造はきわめて簡単である。

通常の大きさの家屋の場合、所有権は通常居住者自身にある。小屋についても、自分で建てたり、前住者から直接譲られた場合には個人の所有物とみなされるが、前住者が死亡したり、

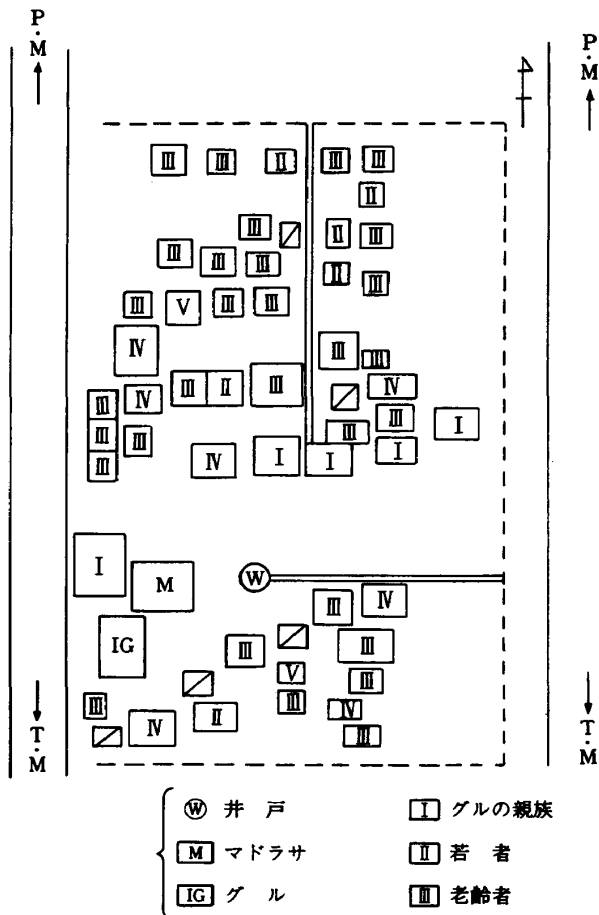


図1 ポンドック家屋配置図(1971年)

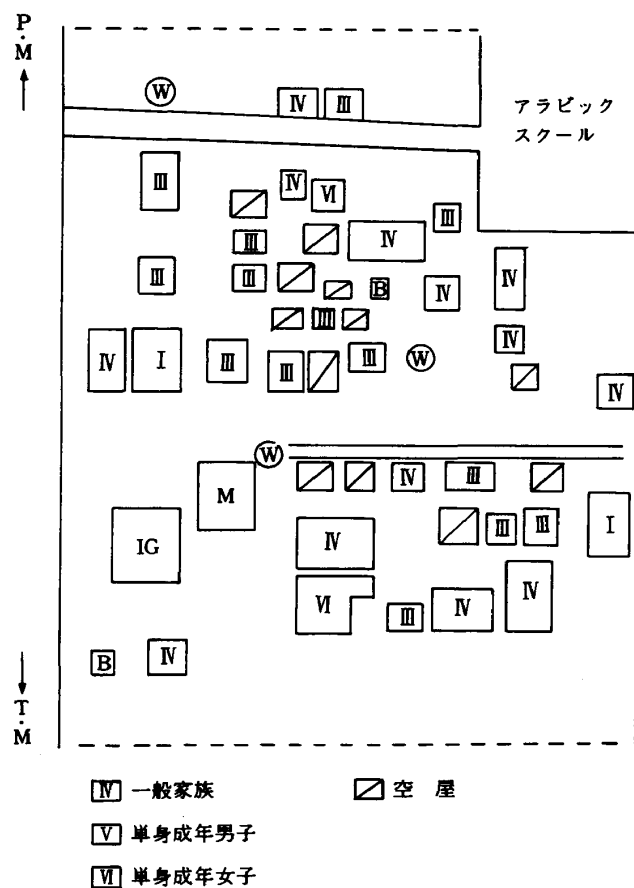


図2 ポンドック家屋配置図(1992年)

小屋を残して去った場合には、共有財産（ワカフ、*wakaf*）としてグルの管理に委ねられる。1971年当時には、家屋（小屋を含む）には便所は付設されておらず、ポンドック居住者は付近の藪の中で用を足していた。このことは周辺の集落の居住者についても同様であった。水はすべての者がポンドック敷地内の中央部にある井戸を用いていた。井戸の側には大きな水槽があり、ポンドック居住者の1人が、月あたり10リングット（当時のレートで1200円程度）の手当てを貰って、毎日、井戸から水槽に水を汲みあげていた。汲み上げられた水は礼拝前に身を清めるために用いられ、ポンドック居住者はこの水を利用するために、月30セン（1リングット=100セン）をグルに支払っていた。また、この時点では、電気はこの地域まで届いておらず、ポンドック居住者達はマドラサで用いられる灯油代として、年間1リングットをグルに支払うことになっていた。精米1ガント（約4.5リットル）が、1.2リングットに相当するとみなされる時代であった。上にあげた費目以外には支払いを義務付けられた費用はなかった。

1992年の時点では、居住条件に大きな変化が起こっている。ポンドック区域の家屋配置は図2に示すとおりである。ポンドックの前を通るパシルマスとタナメラを結ぶ道路の拡幅工事が行われ、グルの家を含んで、道路に面したいくつかの家屋は補償金を貰って、数メートル後退し、この際に、家屋の立て替えや改修を行った。ポンドック区域の背面の水田が埋め立てられて敷地自体の面積は拡大している。その他の家屋や小屋についても、アタップ葺き、編み竹壁の建物は著しく減少し、トタンあるいは新建材の屋根と板壁の建物が増加した。一戸当たりの床面積も以前より大きくなっている。電気が供給されるようになってから10年も過ぎ、1992年には一部の家屋には水道も引かれた。井戸も二つに増えた。中央部の井戸から水を汲み上げるために、電動ポンプが使われ、ポンドックの居住者たちはその電気代として月1リングットをグルに支払う。ポンドック区域内にはかなりの数の便所が作られている。このように、居住条件は以前に比べるとかなりよくなったが、農村部一般の居住条件の向上には及ばない。区域内には水はけの悪い場所が残っていて、雨が降ると数センチメートル水が溜まる。このような意味で、このポンドックは、周りの農村に比べると、相対的にみすばらしい外観と居住環境を保っている。

IV ポンドック居住者の変化 1971-1992

ポンドック区域に居住する世帯を、1971年と1992年の二つの時点について、カテゴリー別および滞在期間別に分類すると、表1のようになる。1971年には、単身者の世帯を含んで53世帯がポンドック区域に住んでいたが、1992年には33世帯にまで減少している。家屋が大きくなったことについては既に触れたが、世帯数の減少はそれだけでは説明できない。1971年には5軒に過ぎなかった空き小屋が、1992年には12軒もある。建物の数（マドラサを含む）が、59軒から

表1 ポンドック滞在期間別に見たカテゴリー別世帯数 1971年 (1992年)

	グルの家族 および親族	若 者	単身の 高齢者	一般家族	単身の 成年男子	単身の 成年女子	計
1年未満			3 (2)		2	(1)	5 (3)
1年			6				6
2年		2	2	(1)			4 (1)
3年			2 (2)				2 (2)
4年			5 (1)				5 (1)
5年		1	3	(1)			4 (1)
6年		2	1 (1)	(1)			3 (2)
7年			1 (1)	(1)			1 (2)
8年			2	(2)			2 (2)
9年	1						1
10年	2		3 (1)	1			6 (1)
11年			(1)				(1)
12年							
13年			2	(1)			2 (1)
14年			(1)				(1)
15年以上	4 (3)		2 (5)	5 (6)		(1)	11 (15)
不明				1			1
計	7 (3)	5	32 (15)	7 (13)	2	(2)	53 (33)

46軒へと減少したのは、それ自体無視できないが、空き家の数が増加しているところに、ポンドックが寂れている様子を実感する。

初代のグルの家族および親族は、1971年には、グル自身の世帯の他に、グルの父親（80歳）、父親の異母妹（62歳）、グルの兄（62歳）、グルの前妻の母親（70歳）、グルの姉（60歳前後）、グルと前妻との間の息子（32歳）の世帯を含んで、合計7世帯がポンドック区域内に居住していたが、前5者が世帯主の高齢での死亡などを契機として消滅した。グル自身の家族は、1971年時点では19歳の妻と1歳の息子から成っていた。グルはこの結婚に先立って4回の結婚経験があり、最初の妻は結婚後わずか3、4カ月で離婚、二番目の妻は12年の結婚生活の後に、4人の子を残して死亡した。三番目と四番目の妻は一時複婚状態にあったが、三番目の妻をまもなく離婚、四番目の妻とは15年の結婚生活の後に死別している。三番目の妻と四番目の妻との間には子はない。1971年時点の結婚は、1969年に始まったが、4年間続いてこれもまた離婚に終わり、この五番目の妻は子供を連れてパハン州で再婚した。グルは、その後、当時30歳過ぎであったコタバル郡出身の女性と再婚した。この最後の妻は、グルの死亡後出身地に戻ってそこで暮らしている。

1992年には、二番目の妻との間に生まれた、グルにとっては最年長の子が、既に述べたように、タナメラから帰ってきて、二代目のグルとして、妻と3人の子とともに、ポンドック区域

の南端道路側に住んでいる。グルの子のうち、宗教的な知識を身につけていたのは、彼だけである。二代目のグルにはこの他に6人の子があるが、上の2人は結婚してそれぞれタナメラとトレンガヌ州に住み、他の4人も家を離れてマレーシア国民大学などに就学中である。すでに述べたグルの親族のうち2世帯だけがポンドック区域に住み続けている。それらのうち、先代のグルの姉の世帯は、5人の孫がそれぞれ他出し、娘夫婦と異母妹を含む4人世帯に縮小している。また、当代のグルの弟は、1971年の時点では、ポンドック前面の道路沿いに住んでいたが、1984年頃に、もと水田であったポンドックの一番奥の土地に、平床のブロック造りの家を建てて移動した。以前は商店と小さな仕立屋を兼業していたが、現在では建築資材として砂を扱っている。家族は、53歳の本人と、46歳の妻、および17歳の2女を筆頭とする6男2女から成り立っている。この他に、既に結婚して他の土地に住む長男と長女、およびマレーシア工業大学に就学中の次男がある。

1971年の時点で5人の若者がポンドックで生活して、宗教を学んでいたことについては既に述べた。1992年には、ポンドックに滞在して宗教を学ぶ若者はもはや一人もいない。また、1971年には1年前に離婚した46歳の男性と、2年前に妻と死別した34歳の男性とがそれぞれ単身で生活し、前者は農業労働をしたり、タバコを栽培したりして生計をたて、後者はタバコ乾燥工場で働いていたが、いずれも間もなくポンドックを去った。

1971年に32人いた単身高齢者についても減少が認められ、1992年には15人になっている。単身高齢者の居住期間を見ると、1971年、1992年ともに1年未満の短期から15年以上の長期まで広く分布しており、高齢者については全体の数が減少しつつも、新陳代謝が行われていることが分かる。しかし、滞在期間が3年に満たないものの割合を見ると、1971年には34.4%であったが、1992年には13.3%に減少し、また、15年以上滞在しているものの割合は、1971年の6.3%から1992年の33.3%に増加している。このことは、ポンドックに新規に来住する高齢者が次第に減少していることを示している。

1992年の時点で、ポンドックに15年以上居住している単身高齢者（孫と居住する者を含む）は以下に示す5人である。

(1) 67歳女子 スンガイクラディ (Sungai Keladi) へいく途中にあるカンポンクエ (Kampung Kueh) の出身で、ポンドックへは20年前に来た。グルとは遠い親戚にあたる。かつて結婚していたが、15年前に離婚した。3人の娘があり、それぞれ、スンガイゴロック (Sungai Gorok)、ジェリ (Jeli)、フタンマラ (Hutan Mala) に住んでいる。土地はなく、タバコ乾燥工場で働いて、日に3～5リングットの収入を得ている。1973年に、チェコック (Cekok) にあった相続財産の水田5枚を他人に売って費用を調達して、メッカ巡礼をした。ポンドックは5メートル×4.5メートル程の大きさのトタン屋根に編み竹壁の粗末なもので、持ち主が死亡した

後、ワカフになっていたものを無料で借りている。電気はなく、水は井戸を使用している。

(2) 68歳女子 チャバンウンパット (Cabang Empat) の出身で、20年間、ポンドックで暮らしている。9回の結婚経験があるが、すべて離婚に終わっている。子はなく、兄の娘(18歳)を養子にして、一緒に住んでいる。土地はなく、2人とも、パダンハングスのタバコ乾燥工場で働いており、1人あたり1日3～5リングットの収入を得ている。ポンドックは自費で建てたもので、4.5メートル×4.5メートル位の大きさの編み竹壁の建物である。電気はなく、水は井戸を利用している。

(3) 62歳女子 隣集落チェコックの生まれだが、母親がポンドックで暮らすようになったのでついてきた。4回の離婚経験がある。ポンドックで生まれた娘(38歳)が、結婚後も隣に住んでおり、他に息子が1人と娘が2人ある。相続財産である水田1エーカーおよびゴム園1エーカーを、スンガイクラディに所有しており、刈り分け小作に出している。現在、このポンドックを一時的に離れて、ルマル (Lemal) のポンドック・ルブックタパック (Pondok Lubuk Tapak) に寄留している。1985年にメッカ巡礼をしたが、その費用は、2人の娘が母親から果樹園1エーカーを買い取ることによって調達された。ポンドックには電気が引かれているが、扇風機、テレビはない。水は隣の娘の家の水道を使う。

(4) 80歳女子 チェコックの出身で、2回結婚したが、2回とも離婚した。ポンドックに来てから14、5年になる。先代のグルと又従妹の関係にある。ポンドック区域には、少し離れて44歳の娘の家族が生活している。他に娘が2人と、息子が1人ある。水田2エーカーを近くのクバングンダン (Kembang Gendang) に所有しており、甥に刈り分け小作をさせている。1967年にメッカ巡礼に行ったが、その費用は、長女に水田2エーカーを売って調達した。3メートル×3メートル位の粗末な、編み竹壁の家屋に住んでおり、電気はなく、水は井戸を利用している。

(5) 70歳女子 ジャボヒリル (Jabo Hilir) の出身で、15年前にやってきた。グルとは遠い親戚関係にある。現在隣に42歳の息子が住んでいる。彼は14歳の時にこのポンドックで学んでいたという。現在、この息子の長男が同居している。夫と一緒にポンドックにきて住んでいたが、そこで死亡した。ポンドック区域の西端の道路に近い部分に雑貨店を開いており、そこからの収入と息子の援助とで生計を立てている。土地所有はない。メッカ巡礼はポンドックに来るよりも前に夫と船で行った。電気は引かれているが、扇風機、テレビはない。水は井戸を使用している。

比較的最近、来住した者として、この3年以内にポンドックに住むようになった高齢者を取り上げると以下の4人である。

(1) 86歳女子　チェコックの出身で、以前はアイエルラナス（Ayer Lanas）に末娘と一緒に住んでいたが、3年前に来住した。5回結婚したが、すべて離婚に終わっている。現在、上の娘がその子供たちと一緒に隣の家屋で生活しており、日常の食事は隣家の娘や孫娘と一緒にしている。相続財産として水田1/2エーカーを所有しており、刈り分け小作に出している。電気はなく、水は井戸を利用している。ただし、目が不自由なので隣家の娘の世話になっている。

(2) 70歳女子　川沿いの隣集落ジャボ（Jabo）の出身で、3年前に来た。夫は3年前に死亡した。自分の子はない。夫の前妻の子（男子）がチェトック（Cetok）に住んでいるが、病身である。グルとは遠い親戚関係がある。ポンドック区域の隣の屋敷地に甥（兄の子）が住んでおり、この甥がポンドックを建ててやった。水田2枚がジャボにあり、刈り分け小作に出している。以前の貯えで生活している。1957年に、ゴム園3エーカーを他人に売って、費用を作り、夫婦でメッカ巡礼をした。電気は引かれているが、扇風機、テレビはない。水は井戸を使用している。

(3) 55歳女子　タナメラ郡の出身で、ルマルのポンドック・ラティ（Pondok Lati）に11年間いたが、モスクの階段が高過ぎるので、1年ばかり前に移転してきた。ポンドックはワカフでグルから与えられた。離婚しており、4人の子がいたが、すべて養子に出した。土地はなく、グルのゴム園で働き、一日1/2リングットを得ている。電気はなく、水は井戸を利用している。

(4) 60歳女子　4カ月前にタナメラのサラック（Salak）から来住し、上記の55歳女子と同じポンドックで暮らして、グルのゴム園で働き、一日1/2リングットを得ている。土地所有はない。夫は7年前に死亡した。子はない。

古くからポンドック区域で生活している単身高齢女子の中には、ポンドック区域の中に子の家族が生活している者もある。メッカ巡礼経験者もあり、概して貧しい生活ではあるが、それなりに生活の体制が整っている。生活条件は、概して悪く、電気さえ引かれていない小屋に生活する場合がある。古くから居住する者にも、新しく来住した者にも、離婚経験者が多いことが目立つ。マレー農村では一般に離婚経験者が多かったのだが、ポンドックではとりわけ多いのである。ポンドックが、不安定な生活を強いられているものを受け入れていることが分かる。このような不安定さの中で、資産を売ってメッカ巡礼を行っている者があることに注意する必

要がある。貧しさを予測しながらも、救済を求める態度が読み取れるからである。近年来住した高齢女子の一部は、古くから居住しているものと基本的に変わらない背景をもっているが、特に最後に来住した2人は、家族生活において恵まれず、ポンドックを宗教生活のための場所として暮らすというよりは、辛うじて生活を維持するための避難所として利用している。

ポンドックに居住する一般家族（高齢であっても夫婦で居住する場合はこのカテゴリーに入れている）は、1971年には7世帯であったが、1992年には13世帯に増加している。1971年の時点では1世帯の不明を除けば、すべての世帯が10年あるいはそれ以上ポンドック区域内に住み続けていたが、1992年時点では6世帯（46.2%）がポンドック区域居住歴が8年以下で、比較的新しい時期に一般家族の来住が増加したことが分かる。これらの新しい来住者は次のようなものを含んでいる。

(1) 40歳女子 近くの集落カンコンで生まれたが、離婚後、第二夫人として再婚し、ポンドック区域に自分の家を建てて、8年間住んでいる。夫はタナメラでイマムをしていたが、1992年に第一夫人とともにメッカへ行きそこで死亡した。夫の死亡後は、日給5リングットでチェコックの小学校の食堂で働いている。8歳と4歳の息子がいる。電気は引いているが、扇風機やテレビはない。水は井戸を利用している。

(2) 43歳女子 隣集落ジャボの生まれで、トックウバン (Tok Uban) に住んでいたが、8年前に来住し、17歳の息子と一緒に住んでいる。夫は第二夫人と、トックウバンに住んでいる。他に27歳、23歳、19歳の息子と、13歳の娘があるが、息子達はそれぞれサバ州、クアラルンプール、ジョホール州で生活しており、娘はガロックで祖母と暮らしている。夫と第二夫人の間には子はない。ゴム園の仕事に雇われたり、菓子を作って近くのコーヒーショップに置かせて貰ったりしている。ときどき息子達からの援助がある。先代グルの又従妹である。電気が引かれていて、扇風機、テレビがある。水道も3カ月ほど前に引かれた。

(3) 78歳男子 隣集落のパダンハングス生まれで、以前、タイ領に居住し、大工をしていた。7年前来住し、妻とともに自前のポンドックに住んでいる。この妻との間には、1人の息子と、4人の娘があるが、息子と、娘の1人はパハン州のゴム園に、他の3人の娘は、クランタン州内に住んでいる。夫は水田1エーカーを相続財産としてパダンハングスに所有しているが、それを刈り分け小作に出している他、妻がタバコ乾燥工場で働いたり、菓子を作ってコーヒーショップに置かせて貰ったりして収入を得ている。10年前に、トックウバンにあったゴム園2エーカーを売って、メッカに巡礼した。電気が引かれているが、扇風機やテレビはない。水は井戸を利用している。

(4) 70歳男子 ジャボの出身で、タイに住んでいたが、6年前にポンドックに来た。50歳の妻ならびに20歳および18歳の未婚の娘と一緒に住んでいる。他に3人の息子がタイに住んで、それぞれ自前で商売をしている。また、離婚した前妻との間の娘（40歳過ぎ）が、隣集落のチェコックに住んでいる。ゴム園労働の他、ポンドックで30人程の子供達にコーランを教えている。先代のグルとは従弟の関係にある。電気は引かれているが、扇風機やテレビはない。水は井戸を利用している。

(5) 25歳男子 夫はタナメラ郡の出身で、タナメラの病院に事務員として勤務しており、23歳の妻と1歳半の娘と一緒に住んでいる。妻はバチョック（Bacok）郡の出身で、1987年にやってきて、ポンドック区域の端に建てられた家屋に住んで、ポンドックの隣のアラビック・スクールの教員をしていたが、ここで結婚生活に入ったものである。家屋はポンドックの隣地に住む土地の住民が所有しており、月20リングットの家賃を支払っている。電気が引かれており、扇風機、テレビがある。水道は2カ月前に引かれた。

(6) 60歳女子 2年程前にスンガイクラディからやってきて、娘と4人の孫とともに住んでいる。夫はスンガイクラディに息子とともに住んでいる。夫は、水田2エーカー、ゴム園0.5エーカーを所有している。同居の娘の夫は行方不明で、娘は製材工場で働いたり、菓子を作って店に置かせてもらったりしている。ポンドック区域の隣の小屋には母親（86歳）が1人で住んでいる。この母親は、5回結婚を経験しており、すべて離婚している。本人は3年前に夫と2人でメッカ巡礼を行った。電気は引かれているが、扇風機、テレビはない。水は井戸を使用している。

一般家族の来住者にはさまざまなものが含まれているが、複婚の経験者やタイ領で生活していた者などが含まれるという点で、普通の家族生活の周辺部に位置する場合が多いとも言える。また、ポンドック区域内の家屋を単なる借家として利用している若い夫婦の例も見落としてはならない。

1971年における世帯のカテゴリーに存在しなかったものとして、1992年には、単身成年女子のカテゴリーに該当するものが2例ある。その1は、25歳の未婚女子で、離婚した母親と一緒に住んでいたが、この母親が1年ほど前にルマルのポンドック・ルブックタパックに寄留するようになって、単身でとり残されたものである。調査時点では、クアラルンプールの近くの姉の家族を訪ねていて不在で、そこで工場労働を始めたと言う。その2は、37歳の女子で、ポンドックには9カ月前に来住した。アタスプティン（Atas Beting）生まれで、アタスプティンに住んでいたが、夫が第二夫人と結婚し、その女を家にいれるというので、離婚を決意し、訴訟

して離婚を獲得した。4人の娘があるが、彼女らは父親と一緒に住んでおり、ときどき会いにくる。タナメラの製材工場で深夜労働をして、日に7.5リングットを得ている。新しい、こざっぱりしたポンドックだが、電気はなく、水は井戸を利用している。これらの2例のうち、前者はポンドックで生活してきた家族の変化の一齣として捉えられ、後者は、ポンドックを避難所として利用した例である。

女性がポンドックを避難所として利用した例は、上述のものが初めてではない。1992年の時点で、46歳の女性が、15年前からポンドックに居住している。コタバル郡シリ村 (Kampung Sirih) 出身のこの女性は足が不自由で歩行が困難であり、社会福祉局から、月40リングットの生活扶助金の支給を受けている。17歳の養女と一緒に暮らしているため、表1では一般家族として分類されている。養女は2人いたが、1人は2、3年前からコタバルでバティック職人をしている。養女の両親は貧しくて家賃が払えず、当時この女性が暮らしていた家に来て二番目の子を出産したという。養女の母親は出産後間もなく死亡、父親も後に死亡した。二番目の子が34日目の時から養っている。身体障害者なのにどうして養子をとったかと人に言われたが、そのことを先代のグルに話すと、養子を手放してはならないと言って、ポンドックを修理して

表2 性・年齢階級別に見たポンドック居住者
1971年・1992年

年齢階級	男		女		計	
	1971	1992	1971	1992	1971	1992
0-4	4	5	4	6	8	11
5-9	4	5	8	8	12	13
10-14	6	7	6	7	12	14
15-19	2	4	6	8	8	12
20-24	4			4	4	4
25-29	2	1	3	1	5	2
30-34	2		2	2	4	2
35-39	2		1	4	3	4
40-44	1	3	1	2	2	5
45-49	2	3	2	3	4	6
50-54	2	1	1	4	3	5
55-59		2	12	1	12	3
60-64	2		7	5	9	5
65-69			8	2	8	2
70-74	1	1	4	6	5	7
75-79		1	2	1	2	2
80-84	1		2	3	3	3
85-				1		1
計	35	33	69	68	104	101

坪内；坪内：あるポンドック（寄宿宗教塾）の変容 1971-1992

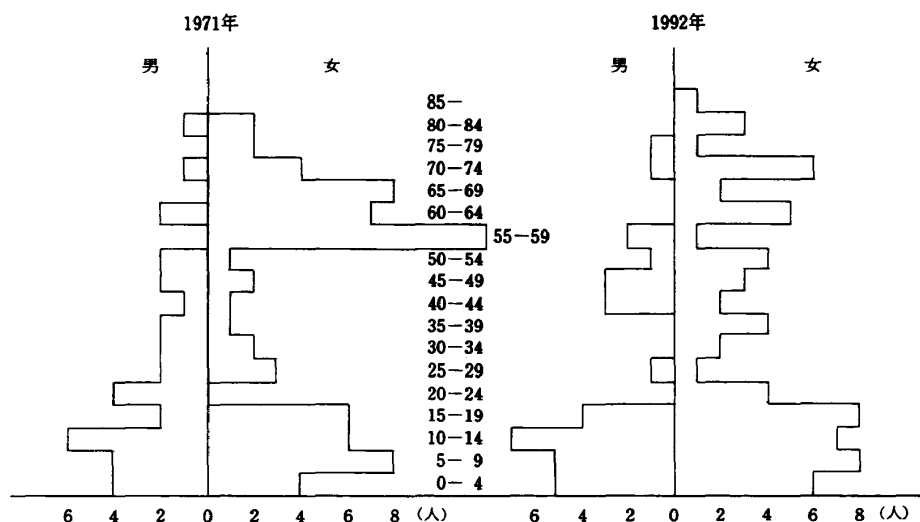


図3 ポンドック居住者の人口ピラミッド 1971, 1992

そこに住ませた。同居の養女は、隣集落チェコックの小学校の食堂で週4日働いて、1日5リンギットの収入があり、週2日はパシルマスへ縫製見習いに通っている。電気は引かれていないが、水道が最近引かれ便利になった。

上述の変化を踏まえて、ポンドック居住者の年齢構造には、表2および図3に示すような変化が現われている。1971年には、55-59歳の前期高年齢の女性を中心に、高齢女子の居住が特に目立っていたが、1992年においては、高齢女子は大きな割合を占めるものの、その突出的な状況は緩和され、さらに、前期高年齢層の居住者が減少して、高年齢女子の平均年齢が上昇している。ポンドックの居住条件が一般の農家に比べて相対的に悪くなったこと、農村部では家屋の大型化が進行して、配偶者を失った老親が子の世帯に引き取られて同居する傾向が強くなったこと [坪内 1992]、さらには、平均寿命が長くなってきたことなどがこの現象に関連している。1971年には、20-39歳の男子が10人住んでいたが、1992年には1人に減少し、若い労働力年齢の者を欠くようになった。ポンドックはもはや生活力のある若い男子の住む場所ではなくなったのである。そして、そこでは生活の弱者になりやすい35-54歳の女性の存在が目立つようになった。

V おわりに——ポンドックの機能の変化

ポンドックが若者の教育の機能を中心に営まれてきた時代が過ぎると、居住者が高齢者を主体とするようになった。このことについては、1970年代の調査報告で既に明らかにしているが、ポンドックの機能が、若者の「教育」から高齢者の魂の「救済」へと変化したと捉えることが

できる。1992年の再訪では、前回の調査時には軽視していたポンドックのもうひとつの機能が前面に押し出されていることが分かった。それは、現世の生活における「避難所」あるいは、「仮の住まい」としての機能である。世間では生活することが困難になった人々が、ポンドックを避難の場として選んだり、適当な住居が見付けられない者が、ポンドックを仮の住まいにするのである。1971年の時点を振り返ってみると、このポンドックでは、当時55歳であったハンセン病の女性が既に13年間住んでおり、また、46歳の精神薄弱気味の男性が、1カ月前に移り住んできたことが、調査記録に残っている。この意味で、「避難所」としての機能は決して新たに出現したものではない。

これらポンドックの三つの機能は、時代的な変遷の過程としても捉えられるが、同時代のポンドックの間の役割の分化としても捉えられる。現在のクランタンにおいても、著名なポンドックでは教育の機能が維持されるばかりか、その強化がはかられているのに対して、ここで扱った弱小ポンドックは、この最後の「避難所」としての役割が目立ってきたといえる。高齢者を主対象とする救済の機能は、一時のブームを経て、沈静化ないし定着化したとみてもよい。「救済」や「避難所」の機能は弱小ポンドックにおいて目立つものの、著名なポンドックにも見られないわけではない。この意味で、役割の分化は相対的なものである。

ここでその実態を示した弱小ポンドックを含めて、避難所機能が強く見られるポンドックは、見方によっては、農村スラムの観を呈している。それらは、衰勢を覆うことができないポンドックである。既に述べたように、従来、神から賦与された超能力をもつと信じられている特定のグルと人々との関係を基軸に、ポンドックは一代限りの性格をもつという見方があった。しかし、実際には二代目のグルによって運営されているポンドックがかなり多いという事実や、上に示したような弱小ポンドックが、変質の過程を経ながらも維持されているという事実は、理想型としてのポンドックだけを念頭において、理解を図ることが片手落ちであることを示唆している。

一度成立した組織は、それなりの生命力をもつこと、解体への過程はきわめて緩やかであることが、再認識されねばならない。ワカフとして提供された土地や建物がそれ自体の存続を続け易いことも、制度のもつ性格に含めて捉えられねばならないであろう。ポンドックが変質しながらも維持されている理由の他の一つは、それが宗教の名において、困窮者を受容する場を提供し得ることである。宗教的な場としてのポンドックは、それが現実を示す貧困の諸様相にもかかわらず、貧困という負の価値を和らげたり、ときには現世の価値を否定することによって、逆転することさえできるのである。

ポンドックの教育機能にこだわる限り、現在の弱小ポンドックの姿は解体そのものである。しかし、すべての組織に変容あるいは変質の可能性を認めるならば、そこには、もう少し大きな視野と時間が与えられねばならない。イスラム原理主義の影響のなかにあって弱小ポンドッ

クの現状が如何に位置付けられるかは微妙なところがある。宗教的精神の現れををどの側面において評価するかという問題である。純粹化の波は、不純な要素を内包する伝統的組織を押しつぶす可能性を秘めている。弱小ポンドックの存在は、この意味でも狭間に置かれたものといわねばならない。さまざまな変化が交錯するなかで、ポンドック全体の姿が歴史から姿を消すには、いましばらくの猶予があるように思われる。

参 考 文 献

- Awang Had Salleh. 1977. *Institusi Pondok di Malaysia*. In *Masyarakat Melayu : Antara Tradisi dan Perubahan*, edited by Zainal Kling. Utusan Publications & Distributors.
- Castles, Lance. 1966. Notes on the Islamic School at Gontor. *Indonesia* No. 1: 30-45.
- Fraser, Thomas M. Jr. 1960. *Rusembilan, a Malay Fishing Village in Southern Thailand*. Ithaca: Cornell University Press.
- 藤本勝次. 1966. 「マラヤにおけるイスラム教育制度」『東南アジア研究』4(2): 2-39.
- Geertz, Clifford. 1960. *The Religion of Java*. Illinois: The Free Press of Glencoe.
- 西野節夫. 1990. 「インドネシアのイスラム教育」勁草書房.
- Rauf, M. A. n. d. Islamic Education. *Intisari* 2 (1).
- Siegel, James. 1969. *The Rope of God*. Berkeley & Los Angeles: University of California Press.
- Sudjoko et al. 1974. *Profil Pesantren, Laporan Hasil Penelitian Pesantren Al-Falak & Delapan Pesantren lain di Bogor*. LP3ES.
- Surin Pitsuwan. 1985. *Islam and Malay Nationalism : A Case Study of the Malay-Muslims of Southern Thailand*. Thai Khadi Research Institute, Thammasat University.
- 坪内良博. 1973. 「クランタンの農村におけるポンド（寄宿宗教塾）——その現状と変容——」『東南アジア研究』11(2): 223-237.
- . 1992. 「マレー農村の20年——人口と家族の変化を中心に——」『東南アジア研究』30(2): 192-212.
- Winzeler, Robert. 1970. *Malay Religion Society and Politics in Kelantan*. Ph. D. Dissertation, University of Chicago.
- . 1974. *The Social Organization of Islam in Kelantan*. In *Kelantan, Religion, Society and Politics in a Malay State*, edited by William R. Roff. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- 矢野 暢. 1970. 「南タイ農村民の村外居住体験について」『東南アジア研究』8(2): 138-170.